

☆ 例題22 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

数年前のことである。ある大学の構内でこんな事件が起こった。二人の男子学生が取っ組み合いのすさまじいケンカを始めたのだ。格闘技^(注1)系の運動部に入っている男子学生が本気で殴ったので、相手の学生は目のあたりを負傷して、たいへんな出血だったらしい。救急車がやってくる騒ぎになってしまった。(中略)

この二人は同じ学部、同じ学科の男子学生で、その年に入学したばかりだった。これから同じ環境であと四年間も一緒に勉強していくわけである。なんとか和解ができないものかと、私はケンカをした二人の学生と一人ずつ面談することにした。

話をきいてみて興味深かったのは、この二人の学生が相手に対して言った言葉がほぼ同じだったことである。

「あいつのことは入学したときから虫が好かなかった。目立ちたがり屋で、軽薄で。あんなヤツと一緒に勉強してると思うと、なんかムカついて。あいつみたいなのが将来、福祉関係の仕事をするなんて絶対許せない」

彼らは相手のことをこんなふうに表現したのだ。言葉の選び方に多少の違いはあるが、内容はほとんど変わらない。「①虫が好かない」という表現はまったく同じだった。

理由はよくわからないが、その人間がなんとなくイヤだ、嫌いだというときに、私たちは「虫が好かない」という表現をよく使う。その“虫”とはなんだろうか？

虫が好く、好かないの背景にあるのは〈投影^(注2)〉という心理である。自分自身が嫌いで隠したいと思っている部分と似た面が相手にみえると、人は無意識に拒絶反応を起こす。相手に自分自身を投影させて嫌悪感を増幅させる。

そこで私は、彼らに②「あなた自身は自分をどんな人間だと思っているのか」という質問を投げかけてみた。深く話しこんでみると、彼らのなかに少しずつ〈気づき〉の兆候^(注3)がみえてきた。「実は子どものころから目立ちたがり屋のところがあったみたいだ」「いつも自信がなくて、誰かにほめられるのを期待していた」といった、自分を振り返る作業を彼らがし始めたからだ。そして、二人の話した内容を比べてみると、自分が嫌だな、人に知られたくないなどと思っている部分が③驚くほどよく似ていたのである。

そのことを二人に話し、私は改めて彼らにきいてみた。ケンカの原因はなんだったと思うかと。すると、面談を開始するまでは互いにムキになっていた彼らが、こんな結論を導き出したのだ。

「今まであいつのことをイヤだ、イヤだと思っていたけど、本当はあいつのことが嫌いというより、自分の目立ちたがり屋のところとか、そういう部分が嫌いで、許せなかったんですね。あいつ

といると自分のイヤな部分をみせつけられているようで……」

自分を内省してみることで、ケンカの原因が二人の対立にあったのではなく、実は自分自身のなかにあったのだと彼らは気づいたのである。

(井上孝代『あの人と和解する』集英社)

(注1) 格闘技：一対一で格闘するスポーツ。柔道、レスリングなど

(注2) 投影：あるものの存在をほかのものの上に映すこと

(注3) 兆候：物事が起こる前ぶれ

問1 ①虫が好かないと表現できる例はどれか。

- 1 とてもイヤなことを言われたので、その人を避けている。
- 2 話したことはないが、なぜかイヤだという気持ちを持つ。
- 3 とても親しかったが、ケンカして嫌いになってしまう。
- 4 初めは親しかったが、何となくつきあわなくなってしまう。

問2 筆者が②「あなた自身は自分をどんな人間だと思っているのか」という質問をしようと思ったのは、なぜか。

- 1 自分のいいところに気づかせたいと思ったから。
- 2 自分自身をよく振り返って反省させたいと思ったから。
- 3 相手のなかに見た、嫌いな自分に気づかせたいと思ったから。
- 4 二人がどんな人間か知りたいと思ったから。

問3 ③驚くほどよく似ていたとあるが、何が似ていたのか。

- 1 二人が話したケンカの原因が似ていた。
- 2 二人の、筆者に対する態度が似ていた。
- 3 二人とも自分のことを人に知られるのが嫌だということが似ていた。
- 4 二人が隠したいと思っている自分自身の弱点が似ていた。



問4 この文章の内容として最も適切なものはどれか。

- 1 筆者はケンカをした学生二人を和解させるために二人と話をしたが、結局、二人は互いに相手に非難し、和解の糸口は見つけられなかった。
- 2 筆者は、ケンカをした二人の学生と話す中で「自分のなかにある嫌な面が相手のなかにもあるのを見たために、相手を嫌っている」ということを二人に気づかせることができた。
- 3 「虫が好かない」という理由で互いを嫌っていた二人の学生は、自己分析をしてもなぜ相手のことが嫌いなのか理由を見つけることができなかつたので、筆者が指摘した。
- 4 自分のなかにある嫌いな部分を他人に見つけた場合、その人に対して嫌悪感を抱くことがあるが、その感情をコントロールしなければならないと筆者が教えた。

キーワード：二人、学生、ケンカ、「虫が好かない」、自分
 → 学生二人のケンカについて書かれた文章？

問1 に答える

例を選ぶ問題。「虫が好かない」の意味は「理由はよくわからないが、その人間がなんとなくイヤだ、嫌いだ」とある。これに合う例を選ぶ。

- 1：イヤなことを言われたという理由がある。
- 2：正解
- 3：ケンカという理由がある。
- 4：つきあわなくなった、というだけでは不十分。

問2 に答える

理由・原因を問う問題。「理由を示す表現」に注目する。

「そこで 私は、…」「あなた自身は自分をどんな人間だと思っているのか」という質問を…
 この前の段落が理由となる。「言い換え」に注目して内容を読み取る。

自分自身が嫌いで隠したいとおもっている部分と似た面が相手にみえる → 拒絶反応
 ↓
 相手に自分自身を投影させて → 嫌悪感を増幅

つまり、相手を嫌うのは、実は、相手のなかに自分の嫌いな部分を見ているからである。
 それに気づかせるために、筆者は下線部②の質問をしたのである。

- 1：気づかせたいのは嫌いで隠したいとおもっている部分で、いいところではない。
- 2：反省させたいとは思っていない。
- 3：正解
- 4：筆者は二人のことを知りたいとは思っていない。

問3 に答える

「下線部」を含む文の構造を見て、「何が」似ていたのかを読み取る。

二人の話した内容を比べてみると、
 自分が嫌だな、人に知られたくないなとおもっている部分が驚くほどよく似ていた。
 ↓
 (二人が隠したいとおもっている自分自身の弱点)

- 1：二人が話した内容は自分はどんな人間かという問いの答えである。「ケンカの原因」はこのときは聞いていない。
- 2：筆者に対する態度については書かれていない。
- 3：知られたくないのは、自分の嫌な部分についてだけである。
- 4：正解

問4 に答える

段落ごとに内容をつかむ。

第1～6段落：ケンカした二人の学生に筆者が面談すると、二人とも相手を「虫が好かない」と表現した。

第7段落：「虫が好かない」の背景にある心理
 =〈投影〉=自分自身のイヤな面を相手のなかに見つけること

第8段落：二人の学生に「あなたは…どんな人間？」と尋ねると、二人の発言は似ていた。

第9～11段落：学生たちは、ケンカの原因は「自分自身のなかにあった」と気づいた。



学生^{がくせい}の気持ち^{きもち}の変化^{へんか}（筆者^{ひつしゃ}の質問^{しつもん}の「前^{まえ}」と「後^{あと}」の対比^{たいひ}）に注目^{ちゅうもく}して、全体^{ぜんたい}をまとめる。

面談^{めんだん}の初め^{はじ}は、ケンカ^{けんか}をした二人^{ふたり}の学生^{がくせい}は、お互い^{たが}に相手^{あいて}のことを「虫^{むし}が好かない^す（＝理由^{りゆう}はわからない^{きらいだ}）」と言^いっていた。（第1～7段落^{だいいちだんらく}）

しかし、筆者^{ひつしゃ}が「自分自身^{じぶんじしん}」について内省^{ないせい}させると、二人^{ふたり}は相手^{あいて}のなかに「自分のイヤな部分^{じぶんぶぶん}」を見ていたことに気づ^きき、ケンカ^{けんか}の本当^{ほんとう}の原因^{げんいん}を理解^{りかい}した。（第8～11段落^{だいいちだんらく}）

「虫^{むし}が好かない^す」という言葉^{ことば}の裏^{うら}には、投影^{とうえい}の心理^{しんり}が隠^{かく}れていたのである。

1：ケンカ^{けんか}の原因^{げんいん}は「自分自身^{じぶんじしん}のなかにあった」と気づ^きき、和解^{わかい}の糸口^{いとぐち}は見つけられた。

2：正解^{せいがい}

3：筆者^{ひつしゃ}が指摘^{してき}したのではなく、自分自身^{じぶんじしん}で見つけることができた。

4：コントロールしなければならぬとは言^いっていない。

練習 55 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

息子は今、忍者に凝っている。サランラップの芯を刀にして、「し、し、しのびあし〜」と歌いながら、忍び足の練習に余念がない(注1)。

バキューバン(ワインの酸化を防ぐため、ボトル内を真空にする道具)をしゅしゅつとすばやく動かしたり、鏡の陰に隠れたりするのも、すべて「しゅぎょう」なんだそうだ。

あるとき、真剣な面持ちで、小さな折り紙を、ぱぱぱつと撒いていたので、「あ〜、しゅりけんね」と言ったら「ちがう! ①えさまいてるの!」という返事がかえってきた。

「えさ?」

「にんじゃは、えさまくでしょ」

「……いや、忍者がまくのは手裏剣^{しゅりけん}じゃないかなあ」

「しゅりけんてなに」

「忍者に、敵が近づいたら、それでやつつけるの……じゃあ、えさってなに?」

「えさは、まくもの!」

えさをまく心やさしい忍者というのを想像すると、ちょっと微笑^{ほほえ}ましいような気もするが、やはりそうではないだろう。確かに、えさをまく動作と、忍者が手裏剣を投げる動作とは、よく似ている。つまり、あの動作そのものを、「えさをまく」というひとつらなりの言葉として、子どもは理解しているようだ。

公園でおじいさんが鳩に何かをぱぱぱつとやっている。それを見て私が「えさまいてるねえ」と言う。テレビでお姉さんがイルカに何かをぱぱぱつとやっている。また私が「えさまいてるんだねえ」と言う。そこで息子は考える。「ふむ、こういうのをえさをまくというのか」。

ある日、忍者の番組をテレビで見たら、同じように何かを②aぱぱぱつとやっていた。②b「あ、えさをまいている!」……ということになるのだろう。

たまたま忍者だったから、この子が「えさをまく」とか「えさ」を③理解していないということがわかったけれど、これがイルカのぬいぐるみに対する行為だったら「えさまいてるの」と言われれば「ああ、そうなの。よくそんな言葉知ってるわねえ」となるところだ。

子どもが言葉をあやつっているように見えても、実は意味が対応していないことも多い。最初にその言葉と出会った状況を、わしづかみ^(注2)にして、子どもは理解している。

(俵万智『ちいさな言葉』岩波書店)

(注1) 余念がない：一生懸命にやっている

(注2) わしづかみ：大きく乱暴につかむこと



問1 ①えさまいてるのとあるが、息子は「えさをまく」をどんな行為と捉えているか。

- | | |
|----------------|---------------|
| 1 小さい物を投げ散らすこと | 2 動物にえさを与えること |
| 3 小さな折り紙で遊ぶこと | 4 敵を攻撃すること |

問2 ②aぱぱぱつとやっていた人、②b「あ、えさをまいている!」と言ったであろう人は、それぞれだれか。

- | | |
|-------------|-------------|
| 1 aは息子、bも息子 | 2 aは息子、bは私 |
| 3 aは忍者、bは私 | 4 aは忍者、bは息子 |

問3 筆者はなぜ息子が③理解していないということがわかったのか。

- 自分が忍者になったつもりで折り紙を投げていることを、息子が「えさをまいている」と表現したから。
- 自分が動物飼育員になったつもりでイルカのぬいぐるみにえさをまいていることを、息子が「えさをまいている」と言ったから。
- 自分がイルカのぬいぐるみに手裏剣^{しゅりけん}を投げていることを、息子が「えさをまいている」と言ったから。
- 公園でおじいさんが鳩にえさをまいているのを見て、息子が「えさをまいている」と言ったから。

問4 この文章の内容として最も適切なものはどれか。

- 息子は最近、忍者にあこがれているが、実は忍者というものを間違って理解している。
- 手裏剣^{しゅりけん}を投げるなど、忍者遊びに夢中になっている息子の姿を見ていると、微笑^{ほほえ}ましい気持ちになってくる。
- 子どもは親の話す言葉をよく聞いていて、親が気づかぬ間に一人で言葉を学習し、成長しているものだ。
- 息子の誤用から、子どもは状況を大きくつかんで言葉の意味を理解しようとするのだと気づいた。